東京大学哲学研究室『論集』37号（2018年度）
pp.133-146

ベルクソン『物質と記憶』における直観と方法

野瀬　彰子

序

ベルクソンは『物質と記憶』第4章で初めて自らの用いる方法に言及する。「われわれの用いようとする方法の一般的原理を定式化しよう」（MM 203）と述べた後に続く長い一段落で、ベルクソンはその方法についていくらか記述しているのである。そこでの記述によれば、「実在」（MM 203）を捉えるには、われわれ人間の通常の経験すなわち人間的経験から出発するのではなく、人間的経験の源へとまず立ち戻らねばならない（cf. MM 205）。それは、人間的経験の源にある「分割されざる連続性の直観」（MM 203）においてこそ実在がわれわれに現前しており、通常「われわれは、並置された要素へと純粋な直観を分割し」（MM 203-4）、それらの要素から「再構成された現象」（MM 204）を認識しているにすぎないからである。ベルクソンの明示する方法は、端的に述べれば、分割された要素で構成されている人間的経験から持続しているものの直観へと立ち戻るという方法である。

本稿の目的はこの方法を検討することである。ベルクソンは、『物質と記憶』の当該箇所で自らの用いる方法を明示し、『思考と動くもの』序論第2部の冒頭では直観が哲学の方法だと述べるので（cf. PM 25）、直観に立ち戻るという方法をベルクソンが他の著作でも一貫して用いているかのように捉えることもできよう。しかし、そのように捉えるといくつか疑問が生じる。人間的経験とは区別される直観という特別な知をわれわれが得ることなどできるのか[1]。さらに、直観に立ち戻るという方法が一貫して用いられているとすると、『創造的進化』で〈経験に基づく推論〉という方法が、『道徳と宗教の二源泉』（以下、『二源泉』と略す）で〈事実の線による推論〉という方法が用いられていることをどのように理解すればよいのか[2]。各々の著作で示されていることを精確に読み解くならば、ベルクソンは同一の方法を一貫して用いているわけではなく、ベルクソンの方法は、ベルクソン哲学の発展の途上で生み出され、それ自体も発展していくことが分かる。しかも、『物質と記憶』においてすら直観に立ち戻るという方法が実際には用いられていないことも明らかにできる。予め結論を端的に述べるならば、『物質と記憶』で実際に用いられている方法とは、いわば直観を手がかりにした推論である。人間

的経験に顕われないものの存在を導き出すには、われわれに顕れている限りの直観を手がかりに推論をするのである。この方法ならば、われわれに顕れていない直観に立ち戻る必要はない。さらに、〈経験に基づく推論〉と〈事実の線による推論〉は、直観を手がかりにした推論の一種だと考えられる。

本稿では以上を次のような手順で明らかにする。まず、『意識に直接与えられるものについての試論』（以下、『試論』と略す）と『物質と記憶』とにおいて持続と直観に関して何が示されているのかを互いに比較しながら捉え直すことで、『物質と記憶』で用いられているのが、直観に立ち戻るという方法ではなく、直観を手がかりにした推論であることを明らかにする（第1節）。次いで、『物質と記憶』で、自我についての直観すなわち「内的直観」（MM 203）のみでなく、物質についての直観すなわち「外的直観」（MM 203）があると述べられていることに注目し、物質についての直観があるとベルクソンが何故考えそのことをいかにして導き出すのかを解明する（第2節）。さらに、それと同時に、物質についての直観の存在も直観を手がかりにした推論により導き出されるということを明らかにする。

１．自我についての直観

１．１　持続についての理論から直観についての理論へ

『物質と記憶』第4章で、直観は持続しているものの知と考えられていた。ところで、『試論』では持続しているものの存在が提示されている。そうすると、たとえ明示されていなくとも、持続しているものの知として直観の存在が『試論』で既に含意されていると捉えることもできよう。だが、持続しているものの存在が『試論』でいかに説明されるのかを精確に読み取るならば、直観の存在は『試論』から考慮に入れられていたのではないことが分かる[3]。そこで、まずは持続しているものの存在についての『試論』での説明を簡潔にまとめよう。ベルクソンは、『試論』において、われわれが一節のメロディーを聴き取ること（cf. DI 75, 77, 78）や振り子が60回揺れるのを見て1分間が経ったとわれわれが分かること（cf. DI 78-9）の例から、持続しているものの存在を説明する。ここでは、メロディーの例を引き合いに出し、持続しているものの存在がいかに示されるのかを確認する。それは次のような例である。われわれは一節のメロディーを聴き取ることがある。そのメロディーは、それを奏でる楽器の諸々の音を感覚したときに得られるので、諸々の音から1つのメロディーが構成されているように思える。

しかし、ベルクソンによれば、メロディーは「外的事物」（cf. DI 79, 94, 103）と

は異なる類のものである。ベルクソンの言う外的事物の有する性格は次の 3 つである。第 1 に、外的事物は、空間中に位置づけられ、或る事物と別の事物が判明に区別され、同じ場所に 2 つかそれ以上のものが置かれることはない「相互外在的」（DI 71, 73）或いは「相互浸透不可能」（cf. DI 66）なものである。第 2 に、事物は、時間が経っても同じものであり続けそれ自体変化しない固定的なものである。そして第 3 に、事物は数えられる量的なものである。数えられる事物は、個物のあいだの相違が無視され、等質的なものと考えられている。メロディーはこれらの 3 つの性格をもたない。しかも、メロディーに含み込まれている諸々の音を外的事物と同じ類のものと捉え、外的事物と同じ性格を有するものからメロディーが構成されると考えることもできない。諸々の音が外的事物と同じ類のものだと仮に考えると、それらの音は相互外在的なのだから、最後の音が感覚されている契機に当の最後の音しかないことになる（cf. DI 78）。それではメロディーに諸々の音が含み込まれていることが説明できない。一節のメロディーに含み込まれている諸々の音も、外的事物と異なる類のものである。

そうして、ベルクソンはメロディーが持続しているものであることを示す。持続しているものは、外的対象とは対立する 3 つの性格をもつ。第 1 に、持続しているものの諸要素は、相互外在的でなく、相互浸透している（cf. DI 78）。一方で、メロディーには、先立つ諸々の音が全て含み込まれている。他方で、先立つ諸々の音のほうは、メロディーによって、メロディーの内での独特な意味をそれぞれ与えられるのである。第 2 に、新たに音が感覚される度に先立つ諸々の音に新たに意味が与えられるのだから、各々の音が帯びる意味を絶えず変化させており、固定的でない。第 3 に、諸々の音は、たとえ音符の上では同じ音だとしても、どれもメロディーの内で独特な意味をもち異質的である。このように、持続しているものと外的事物は対立する性格をもち、それらのあいだには本性の相違がある。

『試論』では、以上のような例から、持続しているものの存在が示される。ただし、『試論』で示されたのは、外的事物或いは物質とは異なる類のものである持続しているものが存在し、持続しているものが物質ではなく自我の側に割り当てられるということのみである。持続しているものとしてのメロディーは、過ぎ去ってしまい自我の内にしかない諸々の音の記憶をも含み込んで成り立っているのだから、それ自体自我の内にある。確かに、『物質と記憶』でベルクソンは、あたかも『試論』で既に自我についての直観が示されていたかのように述べる（cf. MM 206-8）。しかし、持続しているものの存在は明示されていても、持続しているものの知の存在は『試論』で明示されていない。それに、『試論』の内容から考えても、

持続しているものの知の存在について論じる必要はない。というのも、持続しているものは、自我の内にあり、われわれに当然知られているはずだからである。『試論』のベルクソンは持続しているものの知に注目していないのである。

持続しているものの知としての直観の存在は、『物質と記憶』においてこそ、明示され、かつ内容上重要な意義をもつ。『試論』で、ベルクソンは、持続しているものを自我に帰し、反対に持続していないものを物質に帰する二元説の立場を採っている[4]。だが、自我と物質との二元説は、われわれの意識（自我）が物質を捉えることができるのかという問題を生じさせる。この問題を Worms に倣って二元説の問題と呼ぼう（cf. Worms 1997, 189, 194-5, 200-1, 241）。『試論』ではこの問題に言及していないが、『物質と記憶』でベルクソンは二元説の問題を解消することを目指している。そして、直観があると考えることは、後述するように、二元説の問題の解消を可能にする。それゆえ、直観についての理論は、『試論』ではなく、『物質と記憶』において初めて示されている、と解釈できるのである。

１．２　直観に立ち戻るのではなく、直観を手がかりに推論をする

さらに、『物質と記憶』で示された直観についての理論は、二元説の問題を解消するだけでなく、ベルクソンの方法を生み出したという点でも重要な意義をもつ。『物質と記憶』では、『試論』の二元説が批判されるので、自我全体の持続や物質的持続の存在を導き出すのに何らかの方法が必要になるのである。確かに、『物質と記憶』第 4 章でベルクソンは、自我全体の持続の存在が『物質と記憶』と同じ方法によって『試論』でも導き出されたかのように述べている（cf. MM 206-8）。しかし、既述したように、『試論』では、二元説を採るがゆえに、持続しているものの知は考慮に入れられていない。しかも、『試論』の二元説によれば、自我全体の持続の存在は短い持続の存在から自ずと導き出される。『試論』において、短い持続の存在はメロディーの例などから説明されるが、自我全体の持続の存在は何の説明もなく導入されている。そして、自我が絶えまなく持続し、各々の意識的事象が自らの人格全てを反映していると述べられている（cf. DI 122-3）。『試論』で、自我そのものも全体として持続しているとベルクソンは何故考えるのか。推測できる理由は、持続しているものが自我に割り当てられるということのみである。持続していないものは物質に割り当てられるのだから、自我全体が持続していないはずがないのである。それに対して、『物質と記憶』では『試論』と同じ二元説を採らない。そうすると、いくつかの短い持続が自我の内にあるとしても、自我が全体として持続していると言う理由はない。それゆえ、ベルクソンは、『物

質と記憶』において、自我全体の持続の存在を導き出すために、『試論』では用いられていない方法を用いねばならないのである。

とはいえ、『物質と記憶』で実際用いられているのは、直観に立ち戻るという方法ではない。というのも、直観に立ち戻るという方法では自我全体の持続の存在は導き出せないからである。短い持続の直観になら立ち戻ることが可能である。なぜなら、短い持続の直観は、われわれが明確に知っている、いわば顕在的なものだからである。『試論』では、持続しているものを外的事物と混同してしまうことが批判されていたが、メロディーの知などの持続しているものの知の存在が否定されているわけではない。むしろ、メロディーとはわれわれの意識の内にあるものなのだから、『試論』で扱われているのは厳密に言えばメロディーの知である。持続しているものの知が事実上あることが認められているのである[5]。その知の存在に焦点が当てられていないだけである。それに、外的事物と同じ類のものから再構成できないのだから、持続しているものは外的事物と同じ類のものを媒介とすることなく無媒介に直観されていることになる。直観に立ち戻るとは、持続しているものを分割した要素に注意を向けるのを止め、持続しているものを分割することなく見て取ることである（cf. MM 205）。短い持続の直観は、顕在的であり、無媒介にわれわれが有しているものであるから、立ち戻ることが可能である。だがそれに対して、自我が全体として持続しているということをわれわれは明確に知らない。しかも、自我全体の持続を、その内に含み込まれている諸々の短い持続やそれらの短い持続の要素へと分割することなく見て取ることなど、われわれには事実上不可能である。自我全体の持続の直観は顕在的でなく、われわれはそれを無媒介に見て取らないのである。したがって、自我全体の持続の直観に立ち戻るのは不可能である。それゆえ、直観に立ち戻るという方法は、たとえ『物質と記憶』で明示されているとしても、実際には用いられていないはずなのである。

自我全体の持続の直観に立ち戻ることはできないし、直観を無視して自我全体の持続を論じることもできない。そうだとすると、われわれに顕れている限りでの直観を手がかりに推論をし、自我全体の持続の存在を導き出す他ない。ただし、直観を手がかりにするといっても、手がかりとなるのは短い持続の直観だけではない。自我全体の持続の存在を導き出すのには、自我全体の持続についての漠然とした直観も必要である[6]。自我全体の持続についての直観があると考えられるのは、この漠然とした直観を考慮に入れると、短い持続のみが自我の内にあると考えるのが誤りだと分かるからである。仮に、自我の内にさまざまな短い持続があるが、自我全体の持続はないと考えてみよう。そうすると、1 つの短い持続の内の

諸要素は相互浸透しているが、諸々の短い持続どうしは相互浸透することなく孤立していることになる。その場合、いくつかの短い持続が実際と異なる順序で感取されるとしても、何の変わりも生じないと理論上考えられる。しかし、実際には、例えば、1 度目に聴いたメロディーの知と 2 度目に聴いたメロディーの知の順番を変えることさえできない。或るメロディーを 2 度目に聴くときには、われわれは 1 度目に聴いたメロディーの記憶を含み込んだ形で当のメロディーを聴き取っている。持続しているものの感取される順序をわずかでも変えたりなどするならば、全ての短い持続の知が異なる色合いを帯びたものになる。われわれはこのことを漠然と知っている。自らがこれまで感取してきた諸々の短い持続のあいだにも相互浸透があり、諸々の短い持続を含み込んだ形で持続している何かがあることをわれわれは直観している。自らの生きてきた時間、いわば自らの人生が不可逆であることをわれわれは漠然と知っているのである。漠然としたものであれ、自我全体の持続の直観をわれわれはもっている。こうした直観を無視することなく考慮に入れるならば、自我全体の持続が存在すると考えられる。ただし、諸々の短い持続のあいだの関係或いは自らの人生の不可逆性は漠然と知られているのみであり、そうした漠然と知られていることだけではわれわれが自我全体の持続の存在を明確に認めるには至らない。自我全体の持続についての漠然とした直観は、推論を介することで、明るみに出される。

しかも、自我全体の持続の直観が短い持続の直観よりも根底的であることもこの推論から分かる。或る者が或る契機に感取する或るメロディーの知といった短い持続の直観は、精確に捉えられるならば、それぞれ独特な色合いを帯びていて、その色合いは自我全体の持続の内に当の短い持続が含み込まれていることによってもたらされている。短い持続がそれぞれ孤立したものに思えるのは見かけ上でしかない。或る者が或る契機に感取している短い持続そのものには自我全体の持続の直観が反映されているのである。そして、自我全体の持続の直観があるからこそ、各々の短い持続が独特な色合いを帯びて直観されている。短い持続の直観よりも自我全体の持続の直観のほうが根底的なのである。自我全体の持続の直観が根底的だとすると、短い持続の顕在的な直観だけでなく自我全体の持続の漠然とした直観をも手がかりに推論をして、一定の確からしさをもった結論が導き出せることになる。したがって、直観を手がかりにした推論という方法によってこそ、自我全体の持続の直観があることが明らかにされる。しかも、自我全体の持続の漠然とした直観からでも確からしい結論を導き出されるのである。

ところで、『物質と記憶』において、直観に立ち戻るという方法が明示されてい

るにもかかわらず、直観を手がかりにした推論が実際には用いられているということは、『物質と記憶』のベルクソンが自らの用いている方法を正確に捉えていなかったことを含意しているかもしれない。それでも、直観についての理論が『物質と記憶』で示されたことは、ベルクソンの方法が生み出され発展していく過程の重要な一局面である。というのも、直観の存在を考慮に入れるからこそ、短い持続の直観が顕在的なのに対して、自我全体の持続の直観が顕在的でないということを、考察できるようになるからである。そして、自我全体の持続の直観に立ち戻ることはできず、直観を手がかりにした推論を用いねばならないということも、直観についての理論があるからこそ明らかにできる。『創造的進化』で明示される〈経験に基づく推論〉という方法は、直観を手がかりにした推論の一種だと言える。『創造的進化』からは、人間的経験に顕れない形而上学的なものとしての「生命（la Vie）」（cf. EC 49, 339）を探究するためにこうした方法が用いられる。そして、『創造的進化』から『二源泉』までのあいだには、その方法の発展にとともに、生命についてのベルクソンの理論も発展していく。生命についての理論をその発展を踏まえて解明するには、ベルクソンの用いる方法とその発展を明らかにすることが不可欠である。『物質と記憶』における直観についての理論は、ベルクソンの方法だけでなく生命についてのベルクソンの理論が生み出され発展していく道を拓いたという点で重要な意義をもつのである。

だが、既述したように、直観についての理論は、二元説の問題の解消を可能にするという点でも意義をもつ。次節で、ベルクソンが直観についての理論を利用して二元説の問題をいかに解消するのかを明らかにする。そして、それと同時に、物質についての直観に関しても、直観に立ち戻るという方法ではなく、直観を手がかりにした推論という方法が用いられていることを確認する。

２．物質についての直観

２．１　物質についての直観による二元説の問題の解消

『試論』では、持続しているものが自我に割り当てられるのに対して、外的事物は持続しているものとは異なる類のものだと考えられた。そうだとすると、自我の外には持続しているものはないことになる。仮に持続しているものの知が直観だとすると、『試論』によれば、物質についての直観などというのはあり得ない。だが、ベルクソンは『物質と記憶』で、自我についての直観だけでなく、物質についての直観があると述べる。それは、『物質と記憶』で直観についての理論が示

されたことで可能となる。持続しているものを自我に割り当てるのではなく、持続しているものの知があると考える。そうすることで、自我だけでなく物質の側にも持続しているものの知があると考えられるようになるのである。

『物質と記憶』で物質についての直観があると考えるのは、二元説の問題を解消するためである。『試論』のように、自我と物質とのあいだに本性の相違があると考えると、自我が物質を捉えることなどできるのかという問題が生じる。そうではなく、自我についての認識だけでなく物質についての認識の根底にも持続しているものの直観があるならば、自我と物質とのあいだに本性の相違はないということになり、二元説の問題は解消される。物質についての直観とは、物質の側にある持続しているもの（いわば物質的持続）についてのわれわれの知である。

ただし、物質についての直観に立ち戻ることは、自我全体の持続の直観と同様に、われわれには事実上不可能である。後に示すように、直観されていると考えられる物質的持続が極めて短いものであり、われわれの意識に顕れないからである。自我全体の持続のみでなく、物質的持続に関しても、直観に立ち戻るという方法が実際には用いられていないのである。

それでも、二元説の問題を解消するには物質的持続の存在を示さねばならない。物質的持続の存在も、自我全体の持続と同じように、直観を手がかりに推論をすることで導き出される。そのことは『物質と記憶』第4章の中盤部分から読み取れる[7]。ベルクソンは、自らの用いる方法について述べた後に、その方法を「物質に関する問題」（MM 208）に適用し、その帰結を4つの命題の形で説明する（MM 226 cf. MM 209-35）。そこで、ベルクソンは物質についての認識に「質（qualité）」と「量（quantité）」という二側面があることに注目している（cf. MM 245）。質と量との本性の相違は、ちょうど自我と物質との本性の相違と重なる。質がわれわれの意識の側に、量が物質の側に割り当てられ、両者のあいだに本性の相違があると考えても、われわれの意識が物質を捉えることなどできるのかという問題に行き着くのである。そこで、『物質と記憶』第4章では、質と量との本性の相違を解消することが目指される（cf. MM 245）。質と量との本性の相違を解消するために、ベルクソンは、質も量も「実在的運動」（MM 221, cf. MM 215, 217-9, 227）からきており、質の認識の根底にも量の認識の根底にも持続しているものの知があると述べる。この実在的運動こそ本稿で物質的持続と呼ぶものである。このように、質と量との本性の相違を解消するために、ベルクソンは物質についての直観があると考えるのである。とはいえ、以上で示したのは『物質と記憶』第4章の議論の大枠であり、いかに直観が手がかりとされているのかが分からない。直観

を手がかりにした推論がいかになされているかに関しては、質の認識と量の認識についての推論をそれぞれ詳しく見ていかねばならない。

２．２　空間的運動と物質的持続

まずは、量の認識の根底に持続しているものの知があることを説明しよう。ベルクソンは、量の認識の側に属するものとして空間的運動について論じる（cf. MM 209-220）[8]。空間的運動とは、或る点から別の点への空間における移動のことである。或る点から別の点への移動は、運動していると思われる対象と「座標点または座標軸」（MM 215）とのあいだの「距離の変化」（MM 215）として思考される。空間的運動の進んだ距離は、等質的な尺度によって測られ計算可能なのだから、質ではなく量の側に属するのである。

ところで、空間的運動は、われわれの見方によってあったりなかったりする相対的なものであるように思える。例えば、対象と座標点との距離の変化は、われわれの基準とする座標点が移動しているか否かに左右される。仮に、移動しているように見える対象だけでなく座標点も同じ方向へ同じ速度で移動しているならば、対象と座標点との距離は一定で、対象が移動していないのと同じことになる。反対に、対象が移動していなくとも、座標点が移動しているならば、対象と座標点との距離は変化し、対象が移動しているのと同じことになる。ベルクソンは、実際、空間的運動が「見かけ上の運動」（MM 219）にすぎないと述べている。

とはいえ、ベルクソンは、運動が全て見かけ上のものと考えるのではない。空間的運動ではない運動があり、それは「絶対的なもの」（MM 219）だと言うのである。その運動とはわれわれの意識の「質の変化」（MM 219）としての運動である。静止と区別される運動なるものがあると、われわれは実際認めている。そして、例えば、私は、運動が行われていると思う際、対象が動いていようと「私の目」（MM 214）すなわち私の視点が動いていようと関係なく、自らの意識が或る質のものから別の質のものとへと移り変わっていくのを感取する。意識的質の変化から、対象が動いていても私の視点が動いていても、運動があることを感取しているのである。そうした運動の感取は、われわれの視点が動いているか否かによってあったりなかったりする、われわれの見方に相対的なものではない。質の変化としての運動は絶対的なものなのである。空間的運動が認識されている際には、それに先立って質の変化としての運動が感取されている[9]。さらに、質の変化としての運動の知がなければ空間的運動の認識はあり得ない。そのことは、メロディーの知のような短い持続の直観と同様の仕方で説明できる。運動する対象に

ついての諸々の地点における知覚がひとまとまりの運動を成すことは、質の変化としての運動の知、結局は持続しているものの知がなければ分からない。かくして、量の認識の根底に持続しているものの知があることが説明される。

以上のような推論は、質の変化としての運動という持続しているものの直観を手がかりにしている。それゆえ、空間的運動、結局のところ量の認識の根底に持続しているものの知があることが、直観を手がかりにした推論によって導き出される、と解釈できるのである。

２．３　感覚質と物質的持続

今度は、質の認識の根底に持続しているものがあることを確認しよう。ところで、空間的運動或いは量の認識が質の変化についての知に由来するのならば、物質についてのわれわれの認識が全て質の知から成ると考えられる。そうすると、一見、質と量との本性の相違、そして二元説の問題が、既に解消されたかのように思える。しかし、もう一方で、われわれは物質的世界に「規則的秩序」（MM 230）があることを漠然と知っている。規則的秩序は質の知からは説明できないように思える。それならば、二元説の問題は未だ解消されていない。

物質についてのわれわれの認識が元をたどれば質の知であることと、物質的世界に規則的秩序があることとを両立させるために、ベルクソンは、異質的に見える感覚質の内に規則的秩序を説明する要素が実はあると考える。それは、量的なものほど等質的でなく、かつ感覚ほど異質的でない要素である（cf. MM 230）。持続しているものが、感覚質そのものの内にあるという条件と、量的なものほど等質的でなくかつ感覚ほど異質的でないという条件とに、当てはまる。それゆえに、ベルクソンは質の知の根底にも持続しているものの直観があると考える。そこで行われている推論は、自我の短い持続の直観から持続しているものの規定を取り出し、物質的持続に「われわれ自身の意識の連続性とのいくらかの類似」（MM 227）があるとし、持続しているものが件の 2 つの条件に当てはまることを確認するというものである。持続しているものの内では、諸要素が相互浸透し、絶えず変化していて、それらの要素は異質的なものなのだった。感覚質が等質的な要素から構成されるとは考えられない（cf. MM 230）。感覚質を 1 つの持続しているものと考えるならば、感覚質の内に異質的な要素が含み込まれているということが理解できる。そして、感覚質の内に含み込まれているそれらの要素が、異質的であるとはいえ、感覚ほど異質的でないことも理解できる。或るメロディーの知は独特な質をもつが、諸々の音は相互外在的なように思え、同じ音が含まれていること

もあるのだからいくらか等質的である。それと同様に、持続しているものたる感覚質を成す諸要素は、いくらか異質的であると同時にいくらか等質的なのである。

さらに、ベルクソンは、自我の持続との類似によって推論をするだけでなく、感覚質がさほど等質的でもさほど異質的でもない無数の要素から成ることが分かる例から考察してもいる。それは、例えば、色覚が無数の電磁波の波動から成るという例や、ライプニッツが挙げる海のざわめきの知覚についての例である[10]。これらの例において、「われわれは自らの内的状態の継起よりもいっそう高速な継起を自然において予感している」（MM 232）とベルクソンは述べている。海のざわめきの知覚についての例から、感覚ほど異質的でなくかといって量的なものほどは等質的ではない要素が感覚質の内に含み込まれているということを説明できる。仮に、或る契機に私の聞き取った海のざわめきと、別の契機に私の聞き取ったざわめきとが、全く質の異なるものだったとする。だが、各々の契機における海のざわめきの知覚はそれぞれ無数の小さな波の音から成り、2 つのざわめきを成すそれらの小さな波の音のあいだにはほとんど異質性がないように思える。さほど異質的でない無数の現象が、「縮約」（cf. MM 228）され 1 つのものにまとめあげられることで、明確な異質性をもつ感覚質が生み出されるのである。ただしもう一方で、無数の現象が全く等質的だとしたら、感覚質の異質性はわれわれの意識のはたらきのみに依拠していることになり、二元説の問題が再び現れてしまう。それを避けるには、縮約されてできるものを持続しているものと考え、諸要素が全く等質的であるわけではないと考えねばならない。

質の知の根底に持続しているものの直観があることについての以上のような推論も、直観を手がかりにしている。持続しているものの規定は、短い持続の顕在的な直観から取り出される。それだけでなく、物質的世界に規則的秩序があることや感覚質の内にさほど異質的でない要素が含み込まれていることがわれわれに漠然と分かるのも、物質的持続についての漠然とした直観があるからである。物質的持続の存在は、それらの直観を手がかりにした推論で導き出されるのである。

こうして、量の認識に関しても質の認識に関しても、持続しているものいわば物質的持続の直観がその根底にあることが、直観を手がかりにした推論によって明らかにされる。結局のところ、『物質と記憶』でベルクソンの提示する 2 つの持続しているものの存在、すなわち自我全体の持続の存在と物質的持続の存在、いずれを導き出すのにも、直観に立ち戻るという方法ではなく、直観を手がかりにした推論を用いねばならないのである。しかも、われわれが量や質に通常注意を向けていても、持続しているものの直観こそがいっそう根底にあるのである。

結び

本稿の目的は、『物質と記憶』第4章で明示されている方法、いわば直観に立ち戻るという方法の検討だった。以下、本稿で明らかにしたことをまとめよう。

『物質と記憶』でベルクソンは自らの用いる方法に初めて言及する。だが、直観に立ち戻るという方法は、明示されてはいるが、実際には用いられていない。われわれが立ち戻ることができるものがあるとすれば、メロディーの知などの短い持続についての顕在的な直観のみである。自我全体の持続の直観と物質的持続の直観があることを明らかにするには、推論が必要となる。とはいえ、持続しているものの直観のほうがわれわれの通常の経験よりも根底的なのだから、その推論はわれわれに顕れている限りの直観を手がかりにせねばならない。『物質と記憶』で実際に用いられている方法は、直観を手がかりにした推論なのである。

ところで、直観に立ち戻るという方法は実は用いられていないが、『物質と記憶』で示された直観についての理論は、『試論』の持続についての理論と『創造的進化』の生命についての理論とをつなぐという重要な位置づけをもっている。直観についての理論によってこそ、『試論』の二元説の孕んでいる問題が解消される。自我の認識と物質の認識とのいずれの根底にも持続しているものの直観があるならば、自我と物質とのあいだに本性の相違はないのである。だが、それだけでなく、『物質と記憶』で持続しているものの知たる直観に目が向けられることで、直観のあいだの顕在性の差違に気づくことができ、われわれに顕れていないものの存在を導き出すために或る種の方法が必要であることが分かる。その方法が直観を手がかりにした推論である。直観を手がかりにした推論は発展し、『創造的進化』において〈経験に基づく推論〉という方法となり、ベルクソンはその方法によって生命についての理論を構築する。それゆえ、生命についてのベルクソンの理論を解明し検討するためには、『物質と記憶』でいかなる方法が実際に用いられているかを正しく捉えることが重要である。仮に『物質と記憶』で用いられているのが直観に立ち戻るという方法だとすると、それが『創造的進化』における〈経験に基づく推論〉といかに関わるか分からない。そうではなく、『物質と記憶』で用いられているのが直観を手がかりにした推論ならば、〈経験に基づく推論〉はその一種であると考えられるし、二著作の連続性を認めることができるのである[11]。

---

[1] 本稿では、知という語を、外的事物や分割されたものの認識だけでなく、直観をも外延に含む広い意味のものとして使う。

[2] 『創造的進化』で用いられる〈経験に基づく推論〉や、「意識と生命」(『精神のエネルギー』所収）及び『二源泉』で用いられる〈事実の線による推論〉に関しては、拙論（野瀬 2018）で既にいくらか論じている。〈経験に基づく推論〉も〈事実の線による推論〉も直観を手がかりにした推論の一種である点で共通している。

[3] ベルクソンは『思考と動くもの』序論第 2 部とヘフディングへの手紙で、直観についての理論を、最初から示していたのでなく、持続についての理論の後にそれに基づき生み出したと述べる（cf. PM 25, ÉP 456）。それは多くの先行研究でも既に確認されている（cf. Husson 1947, 1, Deleuze 1988, 1, Riquier 2009, 136-7）。だが、直観についての理論が生じたことで、短い持続の直観と自我全体の持続の直観との区別が問題となるのに先行研究は気づいてない。

[4] 『物質と記憶』で解消が試みられる二元説の問題と対応する。dualisme は通常二元論と訳されるが、本稿では~isme（～説）と~logie（～論）という原語の区別を反映し二元説と訳す。

[5] 直観が新たに獲得される何かではなく既にあるものだというのはいくつかの先行研究が認めている（cf. François 2008, 189）。だが、『試論』で示される持続の直観ですら、直観そのものに立ち戻ることなどできず、常に外的認識を通してのみ確認されると考える先行研究もある（cf. 村山 2009, 289）。後述するように、短い持続の直観も、自我全体の持続や物質的持続の直観も、われわれの通常認識しているものの根底にあるのだから、新たに獲得されるのでなく既にある。ただし、漠然とした直観と顕在的な直観との相違がある。自我全体の持続と物質的持続は推論なしにはその存在すら確認されないが、短い持続は推論なしに知られている。

[6] 「形而上学序説」(『思考と動くもの』所収）でベルクソンが「雑然とした直観（l'intuition confuse)」(cf. PM 193）と呼ぶものに対応すると推測される。

[7] 二元説の問題の解消は、確かに、『物質と記憶』第 1 章でも試みられていた。イマージュ説は、知覚と物質とのあいだに程度の差違しかないと考えるものである（cf. MM 35）。もう一方で、感覚を非延長的、知覚を延長的と考えるのではなく、ベルクソンは感覚が拡がりを帯びていることを示す（cf. MM 53, 59, 201）。Worms や平光が、「拡がり（extension)」の概念に注目し二元説の問題を解決しようとするのも、『物質と記憶』第 4 章を第 1 章と関係づけて理解するためだと思われる（cf. Worms 1997, 198, 240-1, 平光 2018, 339）。しかし、感覚を非延長的、知覚を延長的と考える立場に関してベルクソンが批判するのは、感覚と知覚とのあいだに程度の差違しかないと考える点である（cf. MM 56）。それに対して、ベルクソンは感覚と知覚に本性の相違もあることを提示する。それに、知覚と物質のあいだに程度の差違しかないことを示す際に、物質そのものの知覚として仮定される「純粋知覚」(MM 31, 42, 47）は、持続しているものの直観とは言い難い。先行研究はこれらの点を未だ説明できていない。本稿でも『物質と記憶』第 1 章と第 4 章との関係を説明することは未だできない。それでも、『物質と記憶』第 4 章に書いていない拡がりと持続との関係（cf. 平光 2018, 341）をわざわざ考えずとも、物質的持続の直観が質及び量の認識の根底にあると示せるということを本稿では明らかにする。

[8] 『物質と記憶』での空間的運動についての議論は、「形而上学序説」における或る対象の空間的運動についての分析と直観との区別（cf. PM 178）と一見似ているように思える。多くの先行研究が「形而上学序説」で『物質と記憶』第 4 章と同じ直観についての理論が示されたと考えるのも、この点に由来すると推測される（cf. PM 323, Worms 1997, 194-5, 209-10, Riquier 2009, 136-7）。だが、「形而上学序説」で示される直観は、運動している対象に「共感」(cf. PM 178）し、当の対象として自らの運動を感取することである。それは、『物質と記憶』第 4 章のように量と質との本性の相違及び二元説の問題を解消するためのものではない。

[9] ちなみに、運動が知覚されていないときにも、ベルクソンによればわれわれの意識は持続し絶えず変化しているのだから、質の変化としての運動が感取されていることになる。

[10] 色覚などの物理学に関わる例に限らず「諸感覚の精密でない経験」(MM 232）からも感覚が無数の現象から成るのが分かるとベルクソンは述べる。その際ベルクソンが念頭におくのはライプニッツが微小表象を説明する際に挙げるさまざまな例だと推測される（cf. A 6, 6, 53-4)。

[11] だが、『物質と記憶』における物質についての直観に関しては、検討すべき点が残っている。『物質と記憶』で示される二元説の問題への答えに疑問を投げかける余地があるのである。その疑問とは、『物質と記憶』で物質の認識の根底にあると考えられた物質的持続の直観が、本当に

物質の客観的存在の証拠となるのかという疑問である。この疑問が生じるのは、『創造的進化』で『物質と記憶』とは別の仕方で物質の客観的存在が論じられているからである。この点については別の機会に論じる。ただし、その際には、物質についての直観が『物質と記憶』でいかに提示されているのかに関して本稿で明らかにしたことを前提とせねばならない。

［文献表］

１．一次文献

ベルクソンの著作に関しては、下記の略号を用いて引用または参照をする。

DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Puf, [1889] 2011.

MM: *Matière et mémoire*, Puf, [1896] 2008.

EC: *L'évolution créatrice*, Puf, [1907] 2009.

PM: *La pensée et le mouvant*, Puf, [1934] 2013.

ÉP: *Écrits et paroles*, R.M. Mosse-Bastide(éd.), tome 3, Puf, 1959.

ライプニッツの著作の参照は、略号の後に系列、巻、頁数の順で記す。

A: *Sämtliche Schriften und Briefe*, Reihe 6, Band 6, Akademie Verlag, [1962] 2015.

２．その他の著作

Deleuze, Gilles. 1988. *Le bergsonisme*, 2e édition, Puf.

François, Arnaud. 2008. *Bergson, Schopenhauer, Nietzsche. Volonté et réalité*, Puf.

Husson, Léon. 1947. *L'intellectualisme de Bergson. Genèse et développement de la notion bergsoniennes d'intuition*, Alcan.

Jankélévitch, Vladimir. 2008. *Henri Bergson*, 3e édition, Puf.

Riquier, Camille. 2009. *Archéologie de Bergson. Temps et métaphysique*, Puf.

Worms, Frédéric. 1997. *L'introduction à* Matière et mémoire *de Bergson*, Puf.

石井敏夫. 2001. 『ベルクソンの記憶力理論』, 理想社.

杉山直樹. 2006. 『ベルクソン　聴診する経験論』, 創文社.

野瀬彰子. 2018. 「ベルクソンにおける〈生命〉探究の方法の発展」, 『フランス哲学・思想研究』, 第 23 号, 日仏哲学会編, 235-46.

平光哲朗. 2018. 「extension と縮約　『物質と記憶』第四章におけるベルクソンの直観を再考する」, 『ベルクソン『物質と記憶』を再起動する』, 平井靖史他編, 書肆心水, 339-62.

宮崎隆. 2005. 「ベルクソン『物質と記憶』第四章における二重の還元――知覚の運動性と物質」, 『横浜国立大学教育人間科学部紀要 II 人文科学』, 第 7 巻, 横浜国立大学教育人間科学部編, 80-94.

村山達也. 2009. 「ベルクソン『直接与件』における問題と実在」, 『哲学』, 第 60 号, 日本哲学会編, 279-93.